



デ・ニーロの新境地

松本 侑壬子・ジャーナリスト

ハリウッドの大物俳優ロバート・デ・ニーロは、周知の通りイタリア系アメリカ人。ギャングからシリアスもの、ロマンチック・ラブまであらゆる役柄をこなし、受賞歴も豊富な演技派だ。恋愛映画も泣かせる。で、何で今さらこんな甘いタイトルの映画を？しかも、初めてのオール・イタリア語で、純粹（合作でない）イタリア映画で？—それが新境地と言うものでしょう。

ローマはさすが、恋の街。人生を達観したはずの男にも新しい人生が訪れる。分別ある大人にもすべてが変わる出来事が起こり、人生を変える出会いが待っている。デ・ニーロの「我々の年になっても、恋は訪れる」というせりふが不自然に聞こえない。100歳の現役詩人、柴田トヨさんの歌にも「98歳でも、恋はするのよ」（『秘密』）とある。

ボストン大学教授（歴史学）だったエイドリアン（デ・ニーロ）は、定年を機に2年前にローマに移り住み、賑やかな通りに面した堂々たるファサードのアパートの住人となった。7年前に心臓手術を受け、それが原因で夫婦仲がこじれ、離婚に至った。ローマでは一切の誘惑を退け、心臓を^はわりつつ平穏な独身生活を送っている。アパートのオーナー、オーグスト（ミケーレ・ブラチド）とは同世代で話が合い、今では親友同士である。

ある日、オーグストの自慢の娘ビオラ（モニカ・ベルッチ）がパリから突然帰郷したことから、エ

イドリアンの心の平穏が破られる。だって、40歳の豊満な肉体の飛び切りの美人で、言動が無邪気でかわいかったらないのだから。上機嫌の親友親子と一緒にレストランで食事をするうれしさよ。ところが—ビオラについてとんでもない事実が暴露される。有名ブランドの会社にスカウトされて働いている高給取りのキャリアウーマンだと聞かされていたオーグストだったが、実はビオラはレストラン開業に失敗して、今回は借金取りから逃れるための帰国だったと言うのだ。しかも、本当の仕事はストリッパーだと人前でばらされて、大ショック。10年間信じ切っていた娘に裏切られた怒りで、オーグストは娘を家からたたき出す。行き場のないビオラは、深夜エイドリアンのドアをたたく。

親友に内緒でビオラを迎え入れたエイドリアンは、悪びれず素直に自分のことを話すビオラの話聞くうちに、不思議に気持ちが解放されてくる。ビオラの指南でストリップに挑戦、脱いだシャツを空中で2回まわしてポイッと…なんてノリノリだ。

自分の気持ちに素直に生きることが、どれほど人生を自由で豊かにするものか。ビオラと新しい人生を生きたい。手術で新しく生まれ変わったこの心臓は、君に捧げる、と告白。ビオラと手に手を取って光まばゆい南イタリアへ。人間、最後に残るのは恋というのがイタリア的？

実は、これは本作の3つの恋の物語の1つ。若さ美しさ素直さを備えたヒロインの古典的なハッピーエンドものだが、シニアの地平を拓く新境地とも見えるのは、さすがデ・ニーロの楽しげな大人の魅力のせいであろうか。

『昼下がり、ローマの恋』

イタリア映画（126分）／
ジョヴァンニ・ヴェロネージ監督

シネスイッチ銀座他にて全国順次公開

©2011 FILMAURO SH

